今江祥智の本

第1巻

山のむこうは青い海だった

理論社

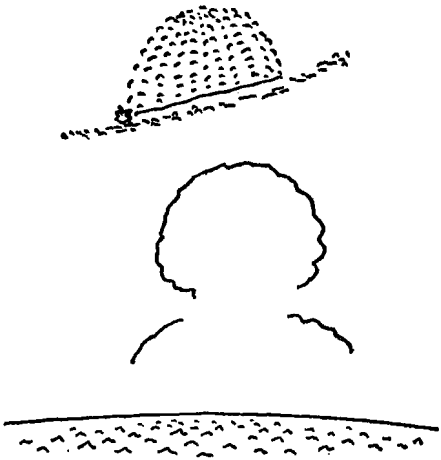
今江祥智の本

第1巻

山のむこうは青い海だった

理論社

今江祥智の本 第1巻
一九八一年二月 初版
一九九一年 四 月 第 七 刷
著者 今江祥智©
発行 株式会社理論社
東京都新宿区若松町一五—六
電話〇三(三二〇三)五七九一〈代表〉
振替東京九—九五七三六
落丁・乱丁本はお取り替えいたします



山のむこうは青い海だった　7
はじまりはこんなふうに　9
消えた少年　22
旅にでて　40
男の子と女の子　48
七人のチンピラ諸君　73
午後に　92
都会と田舎　104
お化け屋敷で　112
花火はあがった　126
キツネを逃がすな！　152
ジャンケンポン　184
山のむこうは……　206

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

麦わら帽子は海の色　211
第一章　日本語のおけいこ　213
第二章　音楽の時間　230
第三章　猫とそよ風　244
第四章　麦わら帽子の季節　259
第五章　そしてお祭りはつづく　275
第六章　ちんぴら釣り　291
第七章　修学旅行　308
第八章　ピアノと教会　324
第九章　クリスマスの歌　340
あとがき　357
解説　鶴見俊輔　359

編集委員　上野瞭
長新太
灰谷健次郎
装　幀　平野甲賀
装　画　長新太

制　作　小宮山量平
発　行　山村光司
編集担当　日比野茂樹

本　文　加藤文明社
表　紙　ダイニック
カバー　トラヤ印刷
製　本　誠製本
用　紙　十条製紙／日興紙業

今江祥智の本　第1巻

山のむこうは青い海だった
麦わら帽子は海の色

山のむこうは青い海だった

むこうの山に
のぼったら
山のむこうは
……

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

はじまりはこんなふうに

1

入学式の日のことだった。

次郎たち新入生一年F組五十人は、担任の先生が教室にやってくるのを待っていた。

みんなばかまじめな顔で、背中にはりがねでもいれたみたいにシャチホコばっていた。とにかく中学生だ。小学校のぼうやたちとはちがう！

お母さんがつきそってきた子もいたが、運動場で待ってもらっている。小学校の入学式のときは、ろうかで待ってもらっていたものだ……。

足音がして、戸があいた。

マッチ棒が背広を着たような先生だった。

一同起立して礼をした。

―おはようございます！

すると、先生はびょこんとおじぎをして、
—おはようございました。
と、すまして言った。
みんな十秒ほどキョトンとして、それからクスクスわらった。へんなあいさつだった。
先生はニコリともせず手をちょっとあげて、
—いや、まあ、待て。わらうのはちょっと待て。
と、言った。
—今はもう十時だ。あんまり早くもない。だからおはようございました、と過去形にしたんだ。
みんな、も一度キョトンとした。へんなこと言う先生だ。
—ところで、ぼくが担任の井山だ。
そして黒板に大きな字で、

井　山

と、書いた。それから一番前の子に、
—大きな声でゆっくり読んでみろ、と言った。
その子はあわてて、
—いやま……と読んだ。やま、ときこえた。
井山先生は、
—いや、まあ、待て、とおさえ、

—おちつくんだよ。まちがえるな。い、や、ま、だ。さあ、もう一度！
—い、や、ま。
—そうだ。それでいい。
そこではじめてニッコリとした。小麦色に陽にやけた顔のなかで、白い歯がひとならび、キラキラ光った。
—さて、はじめに言いたいのは、ひとことだけだ。
だから決して忘れちゃいけないよ、それはね……。

2

—それはね、と井山先生はつづけた、—いつでも、ぼくの名前を忘れるな、ってことなんだ。
こんどはみんなポカンとした。
—もう少しくわしく言うかな。
先生は自分にたずねるように首をかしげて、それから話しだした。
—ぼくはおこりんぼだ、いや、正確に言うとおこりんぼだった。
子どものときからやせっぽちで、そのせいだったかもしれん。やせっぽちは今でもかわらんが、おこりんぼのほうはかわった。そのことを話そう。
とにかくぼくは子どものころ、すごくおこりんぼだった。友だちとかたっぱしからケンカした。いつも勝ったんだけど、とうとう相手がなくなっちまった。ぼくはひとりむすこだから家の中で兄弟げんかをやるわけにもいかん。ぼくはひとりぼっちになった。そのとき考えたんだ。

いや、まあ、待てよ、とな。
おこるまえにちょっと待ってみる。口のなかで十かぞえるんだ。たいていのことはこれでガマンできる。
それからぼくはかわった。みんな、はじめは信じられんふうだったが、そのうち「井山のいや待て」は有名になった。
これだ。
君たちもいろんなときに、いつもこいつを思いおこしてくれたらいい。男の子はゲンコツをふりあげたとき、女の子は涙をこぼしそうになったときにね。男のゲンコツ、女の涙、といって、これはどちらもカッときたときに出てくるやつさ。それをおさえる。
そのためには、ぼくの名前を思いだすんだ。するとひとりでに出てくるんだよ。
「いやま、いやまあ待て……」とな。

みんなクスクスわらった。
—いや、待て。
みんな、わらい顔をぴたりととめた。
—ひとこと、のはずが長くなった。いかんな。いや、これは自分に言いきかせてるんだよ。
先生は自分の頭をコツンとやった。クスクスがまたおこった。
—じゃ、次のことにうつる。
そう言って、先生は小さな紙きれを、一枚ずつくばった。

3

それから先生は、ポケットに手をつっこんで、クシャクシャになった百円札を、つまみだした。
—ほら、百円札だ。
そしてていねいにシワをのばして、
—さて、君たちに考えてほしいことがある。それは、この百円札を自分ならどう使うかってことだ。今、百円もっていたら何に使いたいかってことなんだ。それに、その理由……。

みんなはガヤガヤ言い出した。
女の子たちはさっそくニワトリみたいにしゃべりはじめた。
次郎のうしろの大きな男の子が、
—おい、かわった先生やな……。
と、話しかけてきた。
次郎は返事をしなかった。いや、まあまて、しゃべったらあかん、と思ったからだ。男の子は次郎の沈黙にハラをたてたのか、肩をトンとたたいて何か言おうとする。そのとき号令みたいな声がした。
—いや、待て、みんな！
ニワトリたちはたちまちタマゴみたいに口をとじ、教室は月世界の静かさにもどった。
—黙って、自分で考えるんだ。ひとと相談しちゃだめだ。自分のことは自分でしましょう、……これは小学校

で習ったはずだよ。
こんどはみんな黙って鉛筆のさきっちょをかんだり、窓ごしに青空をボカンとながめたり、口をとんがらせたりして考えはじめた。
次郎はちょっと考えてから書いた。

「百円で往復キノブを買います。
行く先は知らない土地、行ったことがないところをえらびます。
着くとおりて、できるだけそのあたりを歩きまわります。山があるとのぼりますが、なければ川をさがしてそれにそって行きます。
おべんとうをたべてもう一度そこを歩き、よく見て、帰ってきます。
ただし、おへんとうは百円の中にはいりません。母さんに寄付してもらいます。

1F　山根次郎」

4

その日はそれだけだった。
翌日、ホーム・ルームの時間に、井山先生はきのうの君たちの答を読む、と言って紙をとり出した。
女の子がガヤガヤ言いはじめる。ニワトリさんたちは、はずかしがりやさんが多いらしい。
一人にきかれたら、はずかしいやないの。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com